鑑賞教育方法としての美術感想文の可能性（１）
― 感想内容のタイプと美術感想文のスタイル分類 ―

新 井 義 史
北海道教育大学釧路校 美術教育講座

1、はじめに
2、調査方法
3、感想文の分析方法
4、感想内容の8タイプ
5、美術感想文の内容分析
6、代表的事例とスタイル分類
註
(以下次号)

１、はじめに

学校教育において「鑑賞」の活動が含まれている教科には、芸術教科以外にも国語科がある。国語科の文学鑑賞の分野では、小中高を通じて児童文学から純文学まで、幅広い領域の文章や詩歌を鑑賞するためのトレーニングが行われてきた。国語科の教育内容のうち、鑑賞が占めている分量は相当なものがあるといえる。

しかも 10 年程前から、多くの学校において「朝の一斉読書」と名づけられた読書運動が展開されるようになった(註1)。この読書活動の基本は極めてシンプルである。自分が選択した好きな本を、毎日決まった時間、ただ読むだけである。この読書運動誕生の背景には、子どもたちに読書感想文を書かせることが読書嫌いを生み出してしまったことへの反省があるという。感想文を書くために本を読む、あるいは感想文コンクールのために読書するような、目的と行為とが逆転した活動への反省があるという(註2)。

そうした国語科の状況とは異なり、わが国の美術科では鑑賞教育は長い間軽視されてきた。鑑賞重視の方針が浮上してから、すでに相当の年数を経た。しかし、その後いまだ体系的な鑑賞教育方法論を確定しえない現状であり、教育現場の実態としては、子どもたちへの有効な鑑賞能力トレーニングの方法が導入されているとはいえない。

私たちは、日常の生活の中で視覚を通じて活動しているものの、一つの事物や一つの光景を「凝視する」あるいは「見つづける」行為は、予想外に少ない。

美術鑑賞もまた同様である。鑑賞者が一つの作品の前に佇む時間はわずか 5 秒程度との調査結果もある。美術館での鑑賞者の行動では、ゆったりとした散歩のペースで歩きながら作品を眺め、時おり気に入った作品に出会った際に歩みを止めるといったことも珍しくない。美術館以外にも、たとえば図版といえども一枚の絵画作品に 5 分間以上向き合うような機会はほとんど無いであろう。子どもの場合にはなおさらである。落ち着いて一つの事物を見つめる習慣が身についていない小学校低学年の子どもたちへの鑑賞指導では、最初の活動として、じっくりと一つの事物を見つめさせるトレーニングの必要性が説かれている。

鑑賞体験が未熟な者に最初に必要なことは、ひとつの作品をじっくり観る機会を設定することである。以前、一般教養の授業の折、一枚の絵画をもとに「感想」を記述させたことがあった。その際に、初めて美術感想文を書いた学生から次のような感想がよせられた。「感想文を書くという目的がなければ、これだけ長い時間一枚の絵を見続ける

ような経験は一生持てなかったかもしれない。」

絵を見ることにより生じた思いや疑問を、文章に書き記すという行為には時間がかかる。文章を書くための時間も必要だが、そのために見るという時間が必要となる。おそらく一枚の絵を見て、その感想文を書くためには少なくとも30 分はかかるだろう。こうした活動は、作品に向き合いじっくりと対話する機会を得るための一つの方法になりうるだろう。そしてこの方法を有効に活用できるならば、子どもたちが絵を見ることのトレーニング方法として機能しうると考えられるのである。

筆者は、美術作品を見て感想文を記述することを「美術感想文」と呼び、6 年前から演習の一部や講義後の課題に組み込み、鑑賞教育活動に活用してきた。2005 年度には、教養科目「美術」の講義において 4 種類の「美術感想文」を学生に課し、それらの提出物を用いて「美術感想文」の記述内容を検討した。

本稿は、鑑賞教育方法としての可能性を検証する目的で行った、美術感想文に対する「タイプ分類」「スタイル分類」の 2 種類の分析結果を報告するものである。

２、調査方法

（1）感想文の記述方法

① 選定された一枚の絵画図版を見て、その感想を文章で記述させる（自由記述法）。

② 1 回の感想文提出には最低 1 週間の余裕を持たせ、指定期日までに記名して提出させる。

③ 記述する分量は800～1200字程度とし、各自の自由時間を使い記述させる。

（2）調査日時

2005 年 5 月～7月

（3）対象者

教養科目の「美術」選択者 70 名

（北海道教育大学釧路校1～4 年次学生）

（4）感想文の素材

あらかじめ計 4 枚の作品を選定し、それぞれの感想文作成時の留意点を指示しておく。以下に4作品の作者名とタイトル、及び感想文作成時の留意点を記載した。

1）ミロ「パイプを吸う男」（図 2）

① 作品のタイトルを考える（題名を伏せ作品図版のみ提示した）

② 自由に感想を記述する。

2）アンドリュー・ワイエスの「クリスティーナの世界」（図 3）

① 全体観察―主役探し―脇役―周囲の状況観察―（意味の解読）分析といった、課題提示日の講義にて解説した手順を参考に、感想文を記述する。

3）シャガール「誕生日」

① 自由な感想を記述する。

② 疑問点をいくつか挙げ、自分なりに解明してみる。

4）クレー「パルナッソス山」

以下の 3 点を含めた感想を記述する。

① 何を描いたものだろう。

② なぜこのような描き方をしたのだろう。

③ クレーはどのような人だろう。

３、感想文の分析方法

（1）鑑賞と言語行為

美術作品の鑑賞は言い換えれば作品の解釈行為であるともいえる。作品に存在する（含まれる）情報は、鑑賞者の観察力により抽出され、刺激として作用し、内容の解釈行為が開始される。しかしながら、絵画を見ることにより生じた意識というものは、瞬間的であり移ろいやすいものである。最初の出会いの一瞬の思いも、次の瞬間には消え去り既知の情報となり、すぐさま別種の次元に向かってしまう、はかない精神活動でもある。したがって、個人における鑑賞能力や鑑賞活動の過程を、外部の人間が確認するためには、それらの思いを言語化（音声や紙への文字記述）することによって初めて可能になる。

ところで、美術作品の読み取りおよび内容の解釈行為は、はたして言語メディアに記述することが可能であるのかとの素朴な疑問があろう。だが、今回同一作品について記述された多くの感想文の内容を比較検討した際には、文章表現によっても、読み取りの過程（手順）や解釈方法の個性的な特徴が明示されていることが十分に感じられた。

（2）分析方法

感想文の内容を分析する方法としては、①単語レベルまで分解し、それを分類整理する方法、②「文」のレベルにて分類整理する方法があろう。前者のように、単語レベルまで文章をバラバラに分解し整理した場合には、1 枚の作品に含まれている要素や情報をピックアップし、分類することが可能になろう。しかし、それでは個人の読み取り技術（鑑賞能力）向上のためのトレーニングにはつながらないと考えられる。したがって、以下のように「文」の単位を基本において分解しそれらをタイプ分類することを試みた。

（3）分析の手順

① はじめに、感想文を「文」単位に／（スラッシュ）で区切った。
② 次に、それらの「文」が感想活動の7タイプのいずれに該当するかを判定した。
③ 判定の根拠にした、主たる単語はアンダーラインで示した。
④ 斜体の単語は「美的性質」と考えられる箇所を示している
⑤ 各事例ごとに、文章表現内容を示唆するようなスタイル名称を付した。

４、感想内容の８タイプ

以下に示した感想活動のタイプ分類は、1998年11月に実施した鑑賞記録の分析に基づくものである。その際の調査対象者は、北海道教育大学釧路校の美術専攻1年次学生11名であり、講義「造形概説」の授業時間内に実施した演習活動内容から筆者が導き出したものである。その際の調査方法と分析結果は以下のようである。

●調査方法

①ピカソ作「腕を組んで座るサルタンバンク」の図版（図1）を見て、感想をメモ（記述）する。
②記述内容を口頭で発言し、教師が板書する。
③感想の内容を教師が分類･整理する。

●分析結果

ピカソの絵を見た感想内容を分類した結果、以下の8種類に分類することができると考えた。

① 連想タイプ

絵画に描かれた内容をきっかけにして、画面の外部へ意識が抜け出してしまうこと。勝手にお話を作っていってしまうことから「物語」タイプとも言える。幼い子どもによく見られるが、主観的傾向が強い大人にも起こりうる。

― イタリア人のダンスの先生が、生徒の踊りをチェックしているように見える。

— どこかの都会の郊外の結構高さの或るマンションの一室の…気がする。

② 好き嫌いタイプ

直感的に好き嫌いを表明する。理由を説明することもあるが多くの場合は言い放つことで満足する。これもやはり①連想タイプと同様に、幼い子どもや主観的傾向が強い大人にみられる。

— 色使いが自分の好み。

— 妙な髪形と髪の色。

③ 推測タイプ

自分の主観によって意味を特定しようとする。あるいは象徴的な意味のように、絵画に描かれている可視的な属性を見て、それとは異なる別の何かを指し示すこと。相当幅の広い解釈を意味している。

— 年齢は 20 歳代後半のようだ。

— たぶん男だろう。

図 1　ピカソ
「腕を組むサルタンバンク」

④美的性質タイプ

描かれている人や物の存在に感覚的に反応し、それらを共感的に受け入れる状態。全ての人々に一様に生じるものではない。また「美」そのものでもない。(註 3)

— ナイーブな感じ。きれいな女の人だ。

— 柔らかい雰囲気、静か。

⑤形式的タイプ

色や形などの造形性や視覚的属性についての発言。外面的な要素に関する言及で、意味に対する形式をさす。

— 肌に色味がない。構図はオーソドックス。

— 壁の線がゆがんでいる。絵の具を平らに塗ってあるのに肉感や厚みがある。

⑥疑問タイプ

意味が不明確なことに対する反応。疑念の表明。

— 男か女か区別できない。白いものは何だろう。

— なぜこんな格好をしてるのかな。考え事をしてるのかな。

⑦自問自答タイプ

自分が発した疑問に対して、自らが答えを推測すること。自己の内部であれかこれかと思い悩むこと。

— なぜこういう描き方をしたのだろう、気だるい感じを出したかったからかな。

— 自由な生活の青年ぽいかな、でもやっぱり悩みも抱えていそうだな。

⑧知識タイプ

画面以外からの情報に関する言及をさす。

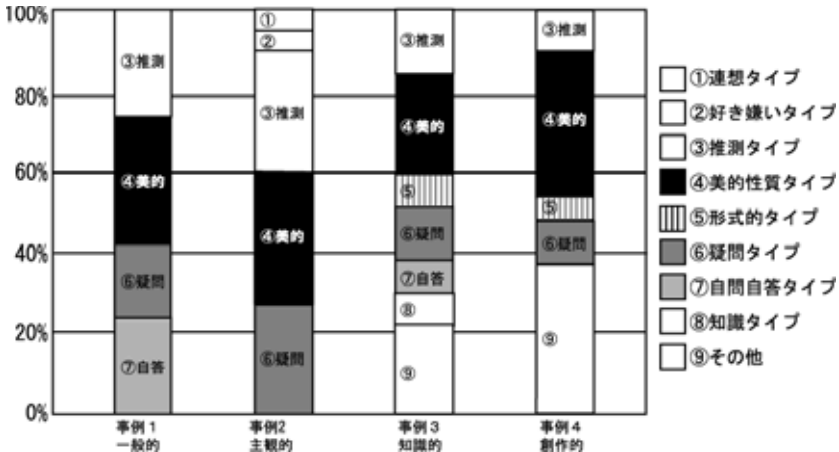
— ピカソの絵だ。

— 制作時期は 20 世紀初期だろう。

5、美術感想文の内容分析

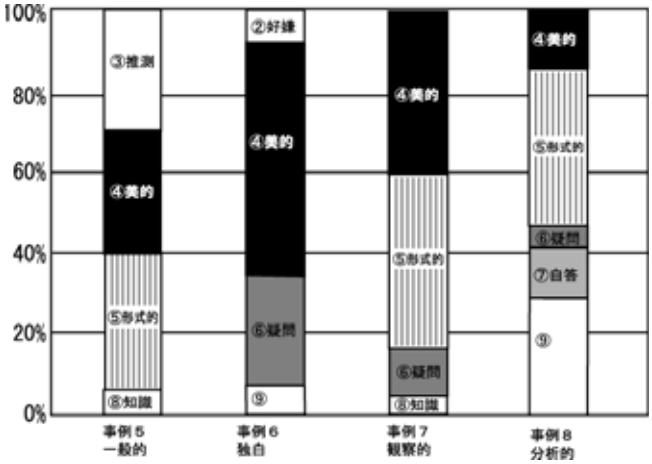
（1）感想内容のタイプ分類の割合

前節では、①連想タイプから⑧知識タイ



プまで、8 種類の「文」の「タイプ分類」を区別した。ただし、感想文には、そのいずれにも当てはまらない種類の「文」が含まれていることから、それを収容する「⑨その他」の項目を加える必要がある。これら合計9種類の分類を、ミロおよびワイエスの感想文の事例に適用した結果が、グラフ1及びグラフ2である。以下、この表も参考にしつつ、を分析したい。

グラフ１　ミロ「パイプを吸う男」タイプ割合



グラフ２　ワイエス「クリスティーナの世界」タイプ割合

（２）ミロ作品の感想文の分析

１）タイプ別の検証

①連想

ミロの絵からは、連想（物語）は生じにくいようである。全体の感想文の中から、ただ一人のみ次のような記述があった。

― まず、左端に描かれている黄色い物体は月のようだ。（③推測）／月が、その隣にいる白い生物が息を吸い込むことによって、ふにゃふにゃの形に歪められてしまっている。（①連想）

ここから分かることは、前段に記述された「黄色い物体は月のようだ。と推測し、その後に黄色い物体を「月」と決め付けた上で、「月が…」と物語を作り始めている。このケースは特例であって、他の人はいずれもが、推測の段階に留まり、連想には至っていない。

②好き嫌い

好き嫌いの表明もまた、全感想文の中にただ一人のみいた。

― 私は黄色が好きなので…

「連想」も「好き嫌い」も、子どもや主観性が強い大人によって表明されがちな傾向である。＜事例2＞は①連想、②好き嫌いの双方を記述しており、そうした面からもこのような雰囲気を持った感想文は「**主観的スタイル**」と呼びうるだろう。

③推測と⑥疑問

ミロの「パイプを吸う男」の絵は、形態が不明瞭でその意味するものも曖昧な作品である。したがって（③推測）も（⑥疑問）も、そのほとんどが形態や意味が茫洋とした「半具象表現」であることから生じている。とりわけ今回のケースでは、タイトルが伏せられていることからも、イメージが固定されにくく、多様な読み取りが行われたことが伺われる。

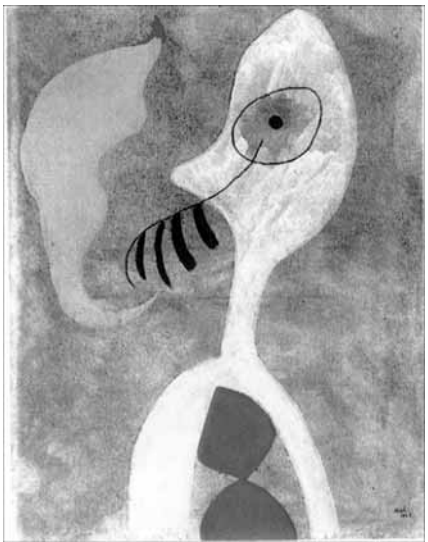
― 丸い線は土の部分を表すのかな？（③推測）

― 白いものは人だと思う。（③推測）

― これは何を描いてあるのか？（⑥疑問）

― 目と思われるところから何か出ている。（⑥疑問）

このような如何様にも考えうる内容に対する推測や疑問は、気楽に記述しやすいことから、初めて感想文に取り組む者には適した絵画であるといえよう。



美術鑑賞の経験が未熟な者にとっては、抽象傾向の強い表現を前にした際にはとまどいを示し、具象傾向の絵画であれば安心感を示すことが通例である。しかし、だからと言って鑑賞初心者が感想を記述するためには、抽象傾向が強いことが妨げになるとは考えにくい。

④美的性質

美的性質についての記述は、鑑賞者と作品との間について行われる感情をベースにした活動であり、おそらく作品鑑賞においては最も重要な発言であると考えられる。表●からも読み取れる[illegible]

図２　ミロ「パイプを吸う男」

「文」のうち、3 割から 4 割もの比率を占めて記述されているのが、この美的性質のスタイルである。

― とても違和感を感じる。

― ツンと押したら倒れてしまいそうだ。

― これは「静」が感じられる。

いわゆる「感動体験」はこれに属する内容である。これは願望や意思にはかかわらず、惹き起こされる心的な反応である。外部刺激により知覚される性質のものでありながら、思考によって生ずるものではなく、「感じられる性質」の内容である。

この「美的性質」には、「論証の手続きを伴わずに表明されるもの」と、「論証を伴なう発言」との 2 種類がある。(註)上に挙げた3つの例文は、論証の手続きを伴っていない例である。

― 色が鮮やかできれいだなと思った。

この場合には、「きれい」だと思ったその理由として、感情を惹き起こした原因となる「色が鮮やかで」という、理由が言及されている。しかし、ミロの絵から生じる美的感想は、論証の手続きを伴っていないケースがほとんどがである。論証を伴なう美的感想の発言については、ワイエスの項目で詳述したい。

⑤形式的

― 描写しているものもわずかである。

― 背景は…塗り残しの跡が多く見られる。

「形式的性質」にあたる、形や色、視覚的効果や造形要素に関する言及は、ミロ作品に関しては驚くほど少なかった。「形式的性質」を取上げるためには、ある程度客観的な見方が必要とされる。ところがミロの作品へのほとんどの関心は不明瞭な形態や色彩への疑問や推測に向かっているがために、客観的な捕らえ方にまでは至らなかったようである。

⑦自問自答

ミロ作品の内容に対する自問自答は、通常のそれとは異なり、③推測的な内容ばかりに占められているケースが目立った。これはやはり、不明瞭な形態に対する意味づけのために揺れ動いている気持ちの表明である。

― …やっぱり人にみえる気がする。

― …だが、「ため息」とすることにした。

⑧知識

日本人にとってミロという作家は、まだなじみが薄いようである。作品にとっての「外在的要素」ともいえる知識に類する記述は、この例以外にはほとんど無かった。ちなみにこれを記述したのは美術を専攻している学生のものであった。

― ミロにはもっと鮮やかな印象があったのだが

― 「生」を感じさせるミロの作品にしては

⑨その他

この「未分類」に分類されるのは、絵の内容に直接結びついていない次のような「文」である。

― 自分の認識にはあまり自信がないのだが。

― とにかく意味が分からない。
― 一度深呼吸してからもう一度作品を見てみる。

ミロ作品の感想文全体の中でも、その他タイプに収められる「文」は、驚くほど少なかった。言い換えれば感想文のほとんどの「文」は、①～⑧のタイプに配置できたわけである。

ところで、後に挙げた＜事例4＞は、3 分の1以上の「文」が「未分類」タイプに分類された特殊なケースである。しかも、この学生の感想文のそれ以外の「文」は、4 割もが「④美的感想」であり、他の学生に見られるような、「③推測」と「⑥疑問」の記述がきわめて少ない。

― まるで悲しみに満ち溢れたモヤのような印象を受けた。 (③主観的な感想)
― このモヤは、見開かれた瞳の中に溢れ、さらには力強く赤く彩られた心臓までも包み込んでいる。 (③主観的な感想)
― そして悲しみの色に満ち溢れた目は、そこから伸びる線を伝って、その思いのたけを吐き出しているように見えた。(⑨その他)

この3つのうち上2つの「文」は③主観的な感想に分類した。しかし、3つめの文についてはミロの絵のイメージをはるかに抜け出し、創作的な領域に踏み込んでいよう。こうした表現内容を (①連想) と呼べなくも無いが、あまりにも質的に昇華されていることから、別扱いすべきと考えた。

２）ミロ作品の感想文の特徴

④推測と⑥疑問および⑦自問自答、これらの3種類のタイプは、画面に描かれている不明瞭な形態が持つ「意味」の部分を探ろうとしている箇所である。自分自身に問いかけたり推測したりする活動という面で、質的には相当類似した記述といえる。したがって、グラフ●のように、この 3 種類の感想タイプを集めてみると、＜事例2：ミロ2「主観的スタイル＞では約 6 割、＜事例1：ミロ1「一般的スタイル＞に至っては、約 7 割近くを占めることになる。

つまり、これらスタイルの感想の記述者は、ミロの半具象に描かれた画面の物体を、具体的なイメージと結びつけるために、文章を書いている時間の相当多くを費やして、「ああかな？こうかな？」と、様々な思いを巡らしていることが読み取れる。明らかな正解が存在しているわけではないミロの絵の解読ならば、感想文の初心者であっても、記述する内容が次々噴出してくるだろうことが予想される。普通に考えると、見るからに不明確な内容の、ミロのような絵は、感想行為には適さないように考えられるが、実際は逆に文章表現しやすい対象であると言えるのだろう。

（３）ワイエス作品の感想文の分析

１）タイプ別の検証

①連想

大学生程度の年齢になると、原則的には①連想作用はあまり生じない。しかしながら、これは個性に関わる問題であり、ワイエス作品に関しては 2 件の興味深い事例が見受けられた。

― クリスティーナは、きっと走って自分の家から飛び出してきたのだ。「はあ、疲れた…」と言っているような気がする。何か家でいやなことがあって抜け出してきたのだ。恋人となにかいざこざがあって逃げ出してきたのかも知れない。…
― この女性は病気でかなり重症です。だんだん視力がなくなってしまいます。体調が悪くなり誰かに助けを求めているけれど、携帯もないので誰にも気づいてもらえません。この女性の病気を治す治療費が高いので家族に捨てられたのかも知れません。この家は放蕩をしていたので彼女は家族に騙されてこの草原に連れてこられたのでしょう。…

主観的な物語を、ここまで長く記述する例は珍しいのであるが、低年齢の子どもにとっては多くの場合いこの例に類

した記述が期待できるだろう。

②好き嫌い

連想と同様に好き嫌いの表明も、大学生にもなると、感想文の中にはほとんど表明されなくなる。ワイエス作品については、描かれた状況の雰囲気に関する反応は数件見うけられた。

— この画面の寂しい雰囲気はあまり好きではない。

— 牧場のように広がっている景色が好き。

— まるで写真のようで、私自身はこの絵は好きです。

③推測⑥疑問

「推測」を示す言葉としては、…気がする。…だろう。…かも知れない。などが代表的である。

— 20 代の女性かなという気がします。（③推測）

— あの倉庫にたべものを取りに行くのかも知れない。（③推測）

— 季節は秋だろうか、収穫が終わったように見えます。（③推測）

この作品では、女性の年齢や女性の行動の推察、季節感や時刻についての推定などが記述されるケースが多い。

— どうしてこの女性は一人でこの場所にいるのでしょうか？（⑥疑問）

この「文」は「疑問」に類別しうるが、次の「文」は「推測」「疑問」のいずれでも構わない内容である。

— この女性は体の弱い女性なのでしょうか？

— もしかしたらこの女性は家族がいないのでしょうか？

図３　ワイエス「クリスティーナの世界」

④美的性質

画面中心にいるクリスティーナの後姿や彼女を取り巻く周囲の自然からは、美的感想に類する言葉を生じさせている。寂しい、悲しそう、孤独感、落ち着いた感じ、不安、いらだちなどの用語は、ほぼ全員の学生が共通して述べている内容である。しかも複数を組合すことにより、その感情表現を増幅して表現している。

ミロの検討の際に言及した、「論証を伴なう美的感想の発言」の例は、ワイエスの感想文からは多くの事例を挙げることができる。

— 色合いも<u>何だか寂しい感じ</u>で

— この女性は腕がとても細く<u>病弱そうに見えます</u>。

— 家も画面からはみ出してしまいそうで<u>バランスが悪い感じだ</u>。

下線の箇所が美的性質の表現であり、その前の部分（前件）が「理由」を示している。「色合いも（黄土色で）」→<u>何だか寂しい感じ</u>。「腕がとても細く」→<u>病弱そうに見えます</u>。「はみ出してしまいそう」で→<u>バランスが悪い感じ</u>。

これらの事例の「前件」は、通常の知覚を備えた人であれば、誰でも識別できる性質のものである。それに対して後ろの部分（後件）は、趣味や感受性、美的判断力を備えた人が感じうる直感的な性質のものである。文章表現においては、「後件」の美的性質の部分の表現が豊かであればあるほど、美的な（芸術的な）感覚に訴えかける文章であるといえるのだろう。

⑤形式的

ワイエスの作品はテンペラや水彩絵の具を用いて克明にリアルに描かれている。したがって当然のことながら、誰に

とっても客観的な観察的事実（形式的性質）の把握が可能である。グラフを見ても明白なように、感想文全体の3分の1以上を形式的性質についての記述が占めている。

— 座り込んでいる女性。

— 一面黄色くなった草で

— 空の色は鉛色

きわめてリアルに描かれたワイエス作品ではあるが、実際のところそれほど多くの事物が描かれているわけではない。主なものは女性と、2軒の建物と、草原と空だけである。限られたモティーフであるがゆえに落ち着いてじっくりと視覚的な情報から意味を組みたてることのトレーニングに適しているだろう。

— 色使いも野原の<u>黄土色が画面の半分以上</u>を占めており、（⑤形式的）／<u>*落ち着いた感じ*</u>だなという印象を受けた。（④美的）

先の例にあげた 「色合いも<u>何だか寂しい感じ</u>で」のような、短い文章表現では分かりにくいのであるが、「美的感想」の理由を示す「前件」には、通常ならば「形式的性質」の言葉が置かれる。これが、シブリーが言うところの、目に見える物質を通じて、目に見えない「美的感情」の伝達を可能にする有効な方法と言われるものである。

⑦自問自答

興味深いことは、ワイエスのこの作品については、自問自答がほとんど見られないことである。⑥疑問自体が少ないのであるから当然ともいえるのではあるが。ただし、＜事例8＞のように、描写された細部にまでこだわって厳密な分析を積み上げていった場合には疑問や自問自答が生じることもあるようである。

— しかし、疑問が溢れてくるばかりで、何を訴えかけている絵なのかが読み取れない…中略…
何だかもう分からないことだらけになってしまった。／むしろ前回のミロの絵の方がいろいろと創造をめぐらせられるので書きやすかった。／ワイエスの絵の方が具体的で分かりやすいはずなのに余計に分からなくなってしまった。

⑧知識

ほとんどの学生にとって、外部からもたらされた知識といえば、次の一文のみである。

— この絵のタイトルはクリスティーナの世界です。

絵画のタイトルは絵の内容を大きく示唆したり、鑑賞する際の思考に影響を与えることも考えられるが、「クリスティーナの世界」というタイトルの情報は、ほとんど思考を制約するような情報たりえていない。これが「思い出」や「農場」というような一般的なタイトルであっても思考への影響は少ないだろう。しかし、「イメージの裏切り」とか「略奪」というタイトルが付けられていたとしたら、この作品に対する見方は大きく変化してしまうだろう。

⑨その他

ミロ同様にワイエス作品の場合も、感想文のほとんどの「文」が①～⑧までのタイプに分類することが可能であった。例外であったのは、⑦自問自答で例文に採り上げた「しかし、疑問が…余計に分からなくなってしまった」の事例だけであった。

2）ワイエス作品の感想文の特徴

「クリスティーナの世界」と名づけられた作品は、中学校美術の教科書にも度々掲載されてきたものである。

— なぜそんな無理をした体勢なのか？（⑥疑問）

— 寝転がっていて体を起こしたからなのか（⑦自答）

この作品では、中心の女性の足が不自由であることが作品理解のための重要なポイントとなっている。しかし、提出された感想文のうち半数以上の学生が、女性の足が不自由であることを見抜けなかった。一瞥すれば容易に全てを理解し得るように感じられる具象画である。しかし、女性の年齢についても、少女から中年まで相当の幅があっ

た。そして、仔細に観察にすると気が付かなかった多様な内容を発見することができる、

— 髪の毛がほつれている→風が吹いているんだ。
— 秋のようなのに半そでで寒そうだ。
— 左側の家には屋根が無い。煙突に煙が出ていない留守のようだ。
— 柵があるのに動物がいない。家畜がいない。
— タイヤの跡が見える。

具体的に描写された個々の事物を検討していけば、単なる観察･記述レベルを超えて、より深い意味の分析にまで踏み込む可能性を持っている。その点では、感覚的な鑑賞活動を楽しむことが出来るミロの作品とは異なり、論理的思考を働かせる鑑賞教育トレーニングとしての発展的な内容を含んでいるといえるだろう。

ワイエス作品のように、内容が整理されており、しかもリアルに描かれた具象画の場合には、1 枚の作品を読み取っていくための基本的な手順をトレーニングするのに適していると考える。そのことを＜事例5＞において示した。

① **作品全体を見渡す**　全体から受ける印象を確認する。漂っているムードや直感的なイメージを見て取るよう心がける。
② **中心は何かを探す**　人物が描かれていれば主役は誰なのか。芝居で言うところの脇役は誰になるのかを考える。静物画や風景画においても、同様に中心や脇役にあたる役割が存在するはずである。
③ **周囲の状況を把握する**　人物を見渡した次には、手前にある事物やバックの状況について目を行き渡らせる。全体を一巡した後で、中心（主役）と周囲の状況とを全体的に眺めるようにする。
④ **意味を探る**　作品のタイトルや、作家や制作された時代に関する知識や情報にも関心を払い、改めて総合的に作者が絵に込めた意味を考える。

６、代表的事例とスタイル分類

（１）感想文のスタイル分類

ミロおよびワイエスの美術感想文の提出者はそれぞれ50 名程であった。全ての感想文を見渡した際に、多くの文章表現が、ある種の類似した傾向または共通した内容を持っているように感じられた。それらはいわば「基本スタイル」と考えられる感想文である。また、それら多数派の感想文とは異なる内容を持った個性的な感想文もあった。したがってここでは、ミロおよびワイエスに関する各4点ずつ合計 8 点の感想文を選定した。標準的な書き方であろうと判断した2件を「基本スタイル」と名づけた。そして個性的あるいは標準的でない内容の記述のもの6件をピックアップし、文章表現をイメージしやすいようなスタイル名称を付して掲載した。

＜事例1＝ミロ1＞、＜事例5＝ワイエス1＞は**「一般的スタイル」**
＜事例2＝ミロ2＞は、**主観的スタイル**
＜事例3＝ミロ3＞は、**知識的スタイル**
＜事例4＝ミロ4＞は、**創作的スタイル**
＜事例6＝ワイエス2＞は、**独白スタイル**
＜事例7＝ワイエス3＞は、**観察的スタイル**
＜事例8＝ワイエス4＞は、**分析的スタイル**

（２）事例紹介

<u>事例１：ミロ１「一般的スタイル」</u>

（女）タイトル＝「想像」

この絵を見て最初に思ったのは<u>「ひと？」</u>でした。（③**推測**）／<u>人</u>にしては<u>のっぺりしている</u>し、（④**美的**）／<u>鼻</u>はあ

っても口は無い。髪も無いし耳も無い。(③推測) ／でも目のようなものはある。(③推測) ／しかも良く見てみると体にあたる部分が空洞！ (③推測) ／やはり人ではないのか？ (⑥疑問) ／でも全体を通してみるとやっぱり人にみえる気がする。(⑦自答) ／目から葉っぱらしきものがぶらさがっているのかな。(③推測) ／そう考えてみると周りの細い丸い線は土の部分を表すのかな？ (③推測) ／でもどうして目を種とするのかな？ (⑥疑問) ／目は私たちが生活する上で最初に活動する部分だからかな (⑦自答) 。／では、あのまぶしく目立っている黄色い煙のようなものは何だろう。(⑥疑問) ／良く見ると先が赤い。(⑦事実) ／普通に考えると煙だが、「ため息」とすることにした。(⑦自答) ／そう考えると絵全体が暗く感じてきた。(④美的)　／しかもものすごく大きなため息だ。(④美的) ／なにをそんなに苦労しているのだろう。(⑥疑問) ／仕事が上手くいかないのかな。(⑦自答) ／魂まで抜けてしまったようにやつれて見える。(④美的) ／病んでいるのかな。(⑥疑問) ／薄い紫に混ざりながらもやもやと浮かんでいる白い色。(④美的) ／空の色がこんな色だったらぱっとしないように、(④美的) ／この絵の人も何か抱えているんだなと思った。(④美的)

事例２：ミロ２　「主観的スタイル」

(女) タイトル＝「深呼吸」

まず、左端に描かれている黄色い物体は月のようだ。(③推測) ／月が、その隣にいる白い生物が息を吸い込むことによって、ふにゃふにゃの形に歪められてしまっている。(①連想)　／白い生物はいったい何者だろう？ (⑥疑問) ／しかし、月と白い生物は向かい合っているようにも見える。(③推測) ／黄色い月は本当は三日月のふっくらした形だったのだろうか？ (⑥疑問) ／月の黄色い色が鮮やかできれいだなと思った。(④美的)) ／私は、黄色が一番好きなので最初に目に入った。（②好き嫌い）／黄色い月の先端は赤くなっている。(⑧事実) ／ここは何だか熱そうな感じがする。(④美的)　次に、白い生物を見てみよう。／目が大きいのだろうか？ (⑥疑問) ／でも目は、何かの草とつながっている。(③推測) ／草からしてみれば白い生物の目は草の根っこの部分だ。(③推測) ／目は種なのだろうか？ (⑥疑問) ／目からニョキニョキと草が生えている。(④美的) ／この生物と草は一体化しているんだ。(④美的) ／この白い生物の鼻は高い。(③推測) ／けれど頭は細いな。(③推測) ／色が白いからこの生物は弱々しく見える。(④美的) ／ツンと指で押したら倒れてしまいそうだ。(④美的) ／もしかしたらこの生物は呼吸するだけでも精一杯なのかな (⑥疑問) …

事例３：ミロ３　「知識的スタイル」

(男：美術専攻生) タイトル＝「休憩」

ミロの抽象画を見る。／抽象画にははかり知れない意思が介在している気がするのでいつもは手が出ないジャンルではあるのだが…。／これは何を描いてあるのか？ (⑥疑問) ／白いものは人だと思う。(③推測) ／*少なくとも嘴がふっとんで鶏冠がどうかなってしまった鶏には見えない。*／では赤い瓢箪のような形をしたものは何だろう？ (⑥疑問) ／…胃？ (③推測) ／外部に見えているのか？ (⑥疑問) ／そんなはずはない。だが、そうだとしたらこれはなかなか悲惨な絵を描いていることになる。(⑦自答) ／なんとなく見えてきた。／これは「くつろいでいる姿」ではないのか。(④美的) ／赤いものを椅子とすれば、人が思い切り椅子に寄りかかっている姿に見えなくもない。(④美的) ／目らしきものから出ているこの草のようなものは髭だろうか。(③推測) ／めがねのアクセサリーあるいは黄色いものを煙と考えればタバコに見える気もする。(③推測) ／だがこれは髭だろう。(⑦自答) ／全体的に使っている色は少なく (⑤形式的) 、描写しているものもわずかである。(⑤形式的) ／わりと殺風景だ。(④美的) ／ミロにはもっと鮮やかな印象があったのだが（⑧知識）、ミロにしては淡白な感じがする (④美的) 。／「生」を感じさせるミロの作品にしては（⑧知識）、これは「静」が感じられる。(④美的) ／そう思うのは自分だけだろうか？／この絵を見てどことなく落ち着いた感情が生まれるのだ。(④美的) ／自分の認識にはあまり自信がないのだが。

事例４：ミロ４　「創作的スタイル」

(女)　タイトル＝「涙」

「何も感じない」これが　、この作品に対する第一印象だった。／とにかく意味が分からない。／何を描いているのかも、何を表現しているのかも全く伝わってこなかった。／一度深呼吸してからもう一度作品を見てみる。／すると最初見たときには気づかなかったものが段々と姿を現し始めた。／まず、絵全体に目を向けてみる。／中央に描かれている白いものはおそらく人だろう。(③推測) ／その胸元で赤く色づいているのはこの人の心臓だろうか？ (③推測) ／目と思われるところから何か出ている。(⑥疑問) ／あの黄色く塗りつぶされているものは何だろう？ (⑥疑問) ／数々の疑問が浮かび上がってくる。／次に視線をバックに移してみる。／背景はなぜだか白い塗り残しの跡が多く見られる。(⑤形式的) ／それを包み込む薄紫色は*柔らかい印象*を受けるが決して*明るいイメージ*ではない。(④美的) ／まるで*悲しみに満ち溢れたモヤのような印象*を受けた。(④美的) ／目を凝らしてみると、*このモヤは、見開かれた瞳の中に溢れ*、(④美的) ／*さらには力強く赤く彩られた心臓までも包み込んでいる。*(④美的) ／*そして悲しみの色に満ち溢れた目は*(④美的) 、／*そこから伸びる線を伝って、その思いのたけを吐き出しているように見えた。*(④美的) ／*この思いのたけこそ絵の中で強烈な印象を放つ黄色が表現するものではないだろうか？*(④美的)

事例５：ワイエス１「一般的スタイル」

　全体を見ると、*殺風景で寂しい印象*を受けます (④美的)　**【①全体を見渡す】**

中心は小屋のほうを向いて座り込んでいる女性。(⑤形式的) ／後姿なのでぜんぜん定かではありませんが、２０代の女性かなという感じがします。(③推測) ／なぜなら、服や靴の形や手がきれいだと思うからです。(④美的) ／そして女性の髪がなびいていることから、風が吹いているのが見て取れます。(⑤形式的) **【②中心は？】**

女性の周囲は一面黄色くなった草で (⑤形式的) ／私はここは何かの畑なのではないかと思います。(③推測) ／色の濃い部分と薄い部分とに分かれていて、(⑤形式的) ／薄い部分は収穫が終わったように見えます。(③推測) ／でも畑にしては草の丈が低すぎるのではないかとも思います。(⑤形式的) ／また、遠くに大きな小屋と中くらいの小屋と小さい小屋とが並んで建っていて、その反対側にやや大きめの小屋が建っています。(⑤形式的) ／他には柵のようなものが見えます。(⑤形式的) **【④周囲の状況】**

この絵のタイトルは「クリスティーナの世界」です。（⑧知識））／ということはこの絵の女性はクリスティーナということになります。(③推測) ／そしてこの絵の風景は彼女の世界そのものということになります。(③推測) ／そうすると、*彼女の世界はとても寂しいもののように*見えてしまいます。(④美的) ／まるで、家を追い出されてしまって、*すがるように*まだ家をみつめているという感じがします。(④美的) ／この絵は草原でひとりぼっちというような*「孤独」というもの、もしくは「寂しさからの開放」*を願っている彼女の気持ちを表している絵かなと思いました。(④美的) **【⑤「意味は？」**

事例６：ワイエス２　「独白スタイル」

（女）

最初に感じたことはとても*悲しい感じ*がする絵だなということでした。(④美的) ／色合いも何だか*寂しい感じ*で、(④美的) ／初めにそういう印象をもって見ると、女性の髪の乱れも体勢も、この絵の*全てが悲しいような寂しいようなそんな感じ*に思えました。(④美的) ／この広大な草原の上でこの女性はたった一人で向こうに見える小さな家に*行きたがっているよう*に私には思えました。(④美的) ／どうしてこの女性はたった一人でこの場所にいるのでしょうか？ (⑥疑問) ／女性が一人でいるということも*寂しさを思わせる*のですが、(④美的)) ／この女性がいる何も無い広大な草原が*さらにこの絵を寂しいような印象を*持たせたように思います。(④美的) ／色が全体的に*何となく悲しい気持ちになる気がする*ので私はこの絵をあまり*好きになれません*でした。(②好き嫌い) ／この女性は腕がもとても細く*病弱*

そうに見えます。(④美的)／この女性は体の弱い女性なのでしょうか？(⑥疑問)／もしそうだとしたら、この情勢の家族はなぜこんな時間までこんな場所に一人で居させるのか疑問に思いました(⑥疑問)／もしかしたらこの女性は家族がいないのでしょうか。(⑥疑問)／この絵を見ているとそういったような疑問が次々と出てきます。

事例７：ワイエス３　「観察的スタイル」

（男）美術科学生

ワイエスの絵は、野原が画面のほとんどを埋め尽くし、(⑤形式的)／遠くには家が何軒かポツリとあり、(⑤形式的)／女性が一人いるというとてもシンプルだと思うような絵だ(⑤形式的)／写実的で風景画に近いような感じで、（⑧知識）／野原の表現や女性の描き方が*キレイだな*と感じる。(④美的)）／色使いも野原の黄土色が画面の半分以上を占めており、(⑤形式的)／*落ち着いた感じ*だなという印象を受けた。(④美的)／しかし、その落ち着きの反面なにか*不安と言うか苛立ち*と言うか、そんな*マイナスの雰囲気*も感じることができるようなフシギな絵だ。(④美的)／私がこの絵を眺めていて、構図がとても変わっているということに気づいた。(⑤形式的)／画面の大半は野原で空は画面の上部にほんの少ししかなく、(⑤形式的)／家も画面から*はみ出してしまいそうで*バランスが悪い感じだ。(④美的)／しかしそのバランスの悪さから何か*不安的なものも感じる*のだろうか。(④美的)／さらに*不安を感じる*ものがある。主役であろう女性の仕草だ。(④美的)／*何かを訴えかけるかのように*、遠くを見つめている。(④美的)／きっと奥にある家を見ているのだろう。(⑤形式的)／しかし家と女性とはかなりの距離がある。(⑤形式的)／*一生かかってもたどり着けないのではないか*とも思わせる。(④美的)／手は前に進もうという仕草は見せているがなぜか*足がついていっていないという感じ*だ。(④美的)／そこにとても*違和感*を感じる。(④美的)／この女性は障害か何かで足が満足に動かせないのではないだろうか。(⑥疑問)／遠くの家は彼女の家であり帰ろうとしているが*思うように動けない*。(④美的)／もしかしたら*心の中で誰かの助けを求めているのか*も知れない。(⑥疑問)／自分の体が*思うように動かないこと*への*苛立ち、悲しみ*みたいなものも感じさせられる。(④美的)

事例８：ワイエス４　「分析的スタイル」

（男）国語科学生

まず全体的に見た。／最初の印象は，*寂しげで悲しげ*だなあという感じを受けました。(④美的)／画面の大部分を占める野原の色は、(⑤形式的)／秋を感じさせる色合いであり、(④美的)／手前に描かれた人物の服の色も淡いピンクであり、(⑤形式的)／画面上部に描かれた家も少なく色合いも明るくはないのである。(⑤形式的)／やはり目に付く部分は、手前の人物と上の方に描かれた家であろう。(⑤形式的)／手前の人物は、状態だけを起こし、少し体をひねって家のほうへ体を向けている。(⑤形式的)／上の家のうち、わずかに見える道の右側の家は、大きな母屋に二つの倉庫のようなものが並べられている。(⑤形式的)／人物の方から見てみよう。／黒い髪を後ろで束ね、(⑤形式的)／野原の色から見ると季節は秋なのに、少し*季節はずれ*な印象を受ける淡いピンクの半そでのワンピースを着ている。(④美的)／状態を少し起こした格好で、両手をつき家のほうへ体をひねっている。(⑤形式的)／なぜそんな無理をした体勢なのか？(⑥疑問)／寝転がっていて体を起こしたからなのか、(⑦自答)／または今転がってしまって両手をついたところなのか。(⑦自答)／もしかしたらこの人物は足が不自由で立てないし歩けないのではないだろうか。(⑦自答)／服装からして決して*裕福な家庭で育った感じ*は受けない。(④美的)／しかし、疑問が溢れてくるばかりで、何を訴えかけている絵なのかが読み取れない。／次に上部の家に目を移してみよう(…中略…)

／何だかもう分からないことだらけになってしまった。／むしろ前回のミロの絵の方がいろいろと創造をめぐらせられるので書きやすかった。／ワイエスの絵の方が具体的で分かりやすいはずなのに余計に分からなくなってしまった。

＜次号に向けて＞

本稿では、ミロ「パイプを吸う男」及びワイエス「クリスティーナの世界」の感想文に関して、感想内容のタイプと感想文のスタイル分類を試みた。次号では、シャガール「誕生日」及びクレー「パルナッソス山へ」の２作についての感想文を分析した後に、美術感想文による教育方法としての可能性を検討したい。

註

１）朝の一斉読書は、read－in として 1960 年代アメリカで行われた。日本では 1988 年が最初だとされる。

２）代田昇「子どもの文化と読書活動」岩崎書店、1984、p.156～160

読書という行為が作文のための手段にすぎなくなっていたり、道徳教育の一環となってしまっていることなど、 感想文による読書への弊害について指摘されている。

３）感想内容のタイプ分類は、当初は「主観的な感想タイプ」、「客観性が強い感想タイプ」の 2 種類に分類していた。しかしその後、③推測タイプ、④美的性質タイプ、⑤形式タイプの 3 種類に分類することにした。

４）●美術教育学研究２　p.77

ここで用いている「美的」とは、シラーが「美的教育」でいうところの「他人の人格や自然界とのかかわりの中でそれらの人や物の存在の仕方を共感的に受け入れることができる状態」をさす。「感覚による知覚、特に感じること、見ること、聞くことなどによる知覚」の意味であり、美醜の概念ではない。

「読書感想文」は学校教育の一環として従来より盛んに行われてきた。しかし、美術作品をもとに感想を記述する活動は、これまでほとんど行われてはこなかった。筆者は、美術作品を見て感想文を記述することを「美術感想文」と呼び、その方法を演習や課題に組み込んできた。本稿では、それら実践により収集した感想文のうち、ミロ「パイプを吸う男」及びワイエス「クリスティーナの世界」の感想文に関して、「文のタイプ」と「感想文のスタイル」の 2 種類に関し分析した結果を報告するものである。

「文のタイプ」では、「文（単文)」を 8 つのタイプに区分した。そうした分類によって、いわゆる「感想」活動にもさまざまな意識活動が混在していることが分かる。また、個々人における知識レベルや鑑賞体験の相違あるいは文章表現能力の違いによって、「感想文のスタイル」を幾種類かに区別することが可能である。

次号では、シャガール「誕生日」及びクレー「パルナッソス山へ」の２作についての感想文を分析した後に、美術感想文による教育方法としての可能性を検討したい。